

大っ嫌いだったアフリカから、 誇れるアフリカへ

From the Africa I hate, to the Africa I'm proud of

ルクムエナ ミンコラ アキイ

Lukumwena Minkola Akyi

僕は生粋のコンゴ民（両親ともコンゴ民主共和国出身）ですが、関西生まれ関西育ちの関西人で、1990年生まれ33歳です。タイトルで書いたとおり、アフリカの大っ嫌いでした。しかも28歳の時まで。今回はそんな大っ嫌いだったアフリカを、どう誇れるようになったかを紹介したいと思います。

いじめ・いじめられ、アフリカ嫌いになる

僕は大阪府箕面市で生まれました。0歳児の時から近くの保育所に入り、周りの日本人の子と同じように育ちました。大きくなっていく中で、肌の色の違いや、自分が外国人だということに気付き始めました。でも、その頃はそんなに気にすることもなく、ただ普通に生活していました。

小学校に入学し、年齢が上がっていくにつれて、自分の見た目がいじめられたり、人からの視線や自分の中身と外見のギャップに、ものすごくコンプレックスを感じるようになってきました。目立たず、後ろの方で過ごしていたのに、何をしても目立つ。このギャップに苦しめられるようになってきたのです。

またその頃は、日本の中では白人は「かっこいい」、黒人でもアメリカ人は「かっこいい、憧れる」なのに、アフリカってなるとよく分からない場所。さらに、世間に出てくるアフリカは、「飢餓、貧困、戦争」などのイメージ。もしくは、「ジャングル、野生」といった極端なワードしか出てこなかったのが、僕の周りではアフリカの国々は、支援する国、お金がないかわいそうな国という認識が多かったです。

そして、次第にいじめられる対象、いじめの対象になりました。いわゆる「黒人いじめ」がものすごくあったのです。自分がアフリカ系黒人だからこんな思いをしないとイケないんだ！ とどんどん思い込んでいきました。中学生くらいからアフリカのことを徐々に嫌

いになり、アフリカのことをシャットアウトして遠ざけるようになりました。親戚と連絡を一切とらない、家族とも話さない、自分は日本人として生きるんだと決意したのです。

その時は、親にも、誰にも相談できず、一人で悩んでいる時期がずっと続いていました。アフリカ大っ嫌いを通り越して、外国人が大っ嫌いでした。大人になってからは少しましになったものの、嫌いという気持ちは変わらず、ずっとそうやって過ごしてきました。

子どもができて変わった自分

考え方を変えるきっかけになったのは、自分に子どもができ父親になったことです。妻は日本人なので、息子はミックスルーツです。そして僕の息子は「ダウン症」です。ミックス+ダウン症というダブルマイノリティです。父親としてどうあるべきか、いろいろ悩みました。夫婦でも何回も話し合いました。なぜそんなに悩むのかを考えた時に、自分は外国ルーツでつらい思いをしたから、息子も同じくつらい思いをすると、そう思い込んでいる自分がいました。その時、自分のルーツをもう一度見直そうと思いました。

しかし、僕は思春期にアフリカが大っ嫌いになり、アフリカを完全にシャットアウトしてきましたので、自分のルーツを知るすべが全くなかったのです。今思うと、自分のルーツを否定してきたせいで、自分ももっともステレオタイプでアフリカへの偏見を持っていたのかもしれませんが。そして、一番身近にいる父親がやっている「AFRIKA meets KANSAI (アフリカミーツ関西)」という団体のイベントに、勇気を出して行ってみることにしました。

イベントに参加して考えが一新しました。そこには僕が思うアフリカではなく、キラキラ輝くかっこいいアフリカが存在していました。本当にかっこよくて衝

ルクムエナ ミンコラ アキイ：1990年、大阪生まれ。両親共にコンゴ民主共和国出身の生粋のコンゴ民でありながら、関西生まれ関西育ちの関西人。建築士でM設計事務所代表（www.m-architectural.com）。その傍ら、コンゴ民、アフリカを愛し誇りに思い活動している。2024年には新団体「GLOBAL JUNCTION」を立ち上げたり、23年ぶりに母国に里帰りすることを計画中。
Instagram：@minkola1017 Facebook：www.facebook.com/m1nkola

自分が変わるきっかけをくれた大切な家族と
2023年11月、尼崎市・西武庫公園



撃を受けたことを、はっきりと覚えています。しかも、母国のコンゴの文化「サプール」。このめちゃくちゃかっこいい文化を知らなかった自分を恥ずかしく思いました。そこからアフリカのことを調べるようになり、いろんなアフリカを知っていきました。

自分がシャットアウトしてきたアフリカは、僕が知る23年前とすごく変わっていました。そして、いろいろ知っていく中で、大っ嫌いだったアフリカのことが、今は好きになり、自分のルーツに誇りを持てるようになりました。

「知る」ことで見える世界が変わる

僕は知ること、見える世界が変わってきました。知ること、嫌いから好きまで変わった自分があるので、他の方も知っていくことで、見える世界は変わっていくのかなと思い始めました。ただ、自分は変わったけれど他の人を巻き込むことはせず、ただただ日常を過ごす日々が3年続きました。

そして、大きく変わったのは、2022年4月です。会社員を辞めて、建築士として設計事務所を立ち上げました。それと同時に、時間を融通できるようになったこともあり、アフリカ系のイベントにも携わることが多くなりました。そうすると、いろいろと見えてくる部分が出てきました。今まではあまり気にしていませんでしたが、日本ではアフリカのことを全くと言えるほど知られていないことも知りました。まさかですが、そもそもアフリカが国ではなく大陸だということも知らない友達がいたりして、改めて日本とアフリカは物理的距離以上に、心理的距離があるのかなと感じたのです。

もちろん一部の人は知っていますが、それでもアフリカはまだマイナーな存在です。もっとみんなにアフリカのことを知ってもらい、考え方やこんな文化もあるんだよっていうのを知ってもらえたらと強く思うようになりました。そこからは本当に無我夢中でいろいろやりました。アフリカンパーティー、マルシェ、トークイベントなどなど。そのおかげで、周りの人の見る目も少しずつ変わってきました。「アフリカって

「AFRIKA meets KANSAI」のファッションショーの出演者たちと
2023年11月、神戸市



すごい進んでるんやね」とか、「なんかアフリカのイメージ変わったわ」など、うれしい言葉ももらっています。知ること、その人たちの感性や、何か今後の人生の足しになってくれたらと思い行動したり、発信をしています。

子どもたちのためにできること

しかし、僕が発信し続ける本当の理由は、息子のため、ミックスの子どもたちのためです。僕は子どもの頃はしんどい思いをしてきました。いじめられ、いじられ、自分のルーツを嫌いになりました。そのせいで失ったものもたくさんあります。子どもたちにはそうはなってほしくない！！今は辛いこともあるけど、大人になれば必ず自分のルーツが複数あることが強みになるっていうのを伝えたい。自分を誇りに思っほしい。そして活躍していつかほしいと思っています。そして、その子たちが下の子たちに、その思いを受け継いでいく。そんな感じで伝わっていけばいいと思っています。息子がもし何か壁にぶち当たったときに、その壁を少しでも上りやすくしてあげたいと思っています。

2023年の「AFRIKA meets KANSAI」は10月21日から1か月間、神戸で連続イベントを行い、その運営に関わりました。アート、食、ファッションなど、アフリカの文化や人を体感でき、本当に多くの人に参加してくれて盛り上がりました。今年はイベントの中の一部のコンテンツを僕が企画し、「子どもの森 神戸」を会場にして、子ども向けの企画を2日間行いました。また、2024年には、「GLOBAL JUNCTION」という団体を立ち上げ、さまざまな文化に触れ、人生の分岐点になるような活動をしていこうと準備中です。アフリカンキッズクラブ関西の活動にも関わっていきたくと思っています。

今僕は、アフリカのことが大好きになりました。そして、2024年には23年間出ずにいた日本から出て、母国のコンゴ民主共和国に里帰りすることを決意しました。これからも、日本生まれ日本育ちのコンゴ民主共和国人だからこそできる何かをしていきたいと思っています。